I.T.I. NEWS
No. 120.
INTERNATIONAL THEATRE INSTITUTE

（社）国際演劇協会日本センター
（ITI/ユネスコ）
東京都渋谷区千駄ヶ谷4-18-1　国立能楽堂内
発行人　永井　多恵子　TEL. 03-3478-2189
編集人　小田切　ようこ　FAX. 03-3478-7218
2010. 2. 10.　発行　E-mail : iti@topaz.dti.ne.jp
http://www.green.dti.ne.jp/~iti/

ご挨拶
― 演劇の社会的役割を示す活動を

会長　永井多恵子

皆様に新年のご挨拶を申し上げます。

二十一世紀も最初の十年の区切りの年を迎えました。

昨年も、時代の変化が激しいことを実感させられる出来事が続きました。私たちをとりまく環境に目をやっても、一昨年来、公益法人改革が進行中であり、平成二十五年までに、これまでの社団法人（現在は特例民法法人）は、公益社団法人、一般社団法人のいずれかを選択しなければならない（そうでなければ解散）という状況におかれています。

昨年末に大きな話題となった政府の行政刷新会議による「事業仕分け」の例にも見られるように、昨今では政府機関から民間団体に委託される事業や補助金について厳しい目が向けられており、当協会の所轄官庁である文化庁の事業も、昨年の事業仕分けにおいて、廃止・縮減される事業と新設・拡充される事業がはっきり分かれ、二十二年度予算にも反映されています。

当協会は、昭和二十六年の設立以来、演劇文化の向上と国際交流の進展に寄与すべく、演劇に関する調査研究を主要な活動としてきたところですが、近年では、純粋な調査研究に留まらず、一般に知られる機会の少ない秀作戯曲について将来の上演の可能性を広げるためにドラマリーディングを多数手がけております。

昨年八月には、「国際児童青少年演劇フェスティバルおきなわ（キジムナーフェスタ）二〇〇九」で二作品（「ハンナとハンナ」、「ナイトブラインド」）を上演したほか、十一月には、早稲田大学大隈講堂で「感劇・環境」と題して日中独三カ国の戯曲を上演、さらに十二月には、日本-ドナウ交流年に因んでセルビア、クロアチア、ルーマニアの三戯曲を紹介する「バルカン半島の同時代演劇」の上演など、国際的なネットワークを生かしたプログラムに果敢に取り組み、成果をあげました。このほか、文化庁の人材育成支援事業として、毎年、伝統芸能ワークショップ（今年度は「狂言」を実施）も継続的に実施しています。

今後も、ギリシャ悲劇以来、人類の歴史とともに歩んできた演劇の社会的役割を明示して、当協会の存在価値をこれまで以上に社会に対して示していくことが求められます。

理事会員の皆様には、当協会の活動に対して、より一層のご支援ご指導を賜りますよう、お願い申し上げます。

新事務局長に曽田修司さん

昨年十一月より、事務局長に曽田修司氏を迎えました。氏は、跡見学園女子大学マネジメント学部教授であり、アートマネジメントの専門家です。大学での職責に加えて、新たに外部役職の兼務というかたちで関わっていただきます。公益法人改革をはじめとして、法人経営に力を発揮していただくことを期待しています。なお、前事務局長の小田切ようこ理事は、国際理事として、また、国際演劇年鑑の編集発行等に引き続きご尽力いただきます。会員の皆様には、新たな事務局体制に対して、ご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

報告1

平成21年度 ドラマ リーディング 三題

■キジムナー・フェスタ（沖縄）
■感劇・環境
■紛争地域から生まれた演劇

ITI ドラマ・リーディング @キジムナーフェスタ

中山夏織

ITIの事業としては少しばかり異彩を放つことになったのが、「二〇〇九国際児童青少年演劇フェスティバルおきなわ（キジムナーフェスタ）」に参加してのリーディング公演である。二〇〇九年八月六日と七日、沖縄県沖縄市の「沖縄働く婦人の家」で二作品、各三回の上演を行った。このプロジェクトが異彩を放つ意味は、東京での実施ではないこと、児童青少年演劇の戯曲のリーディングであることの二点に集約されるからである。

キジムナーフェスタは沖縄県沖縄市を舞台に、二〇〇五年から毎年夏開催されている一大フェスティバルだ。十数か所に上る会場がすべて徒歩圏内に設置されていることもあって、海外のフェスティバル感覚を兼ね備えた「目に見える」フェスティバルでもある。そこに毎年、日本を含む世界十数カ国から児童青少年演劇の劇団、海外のフェスティバル・プロデューサーや演劇教育の実践家といった関係者、さらにはそのフェスティバルを支える日本人スタッフやボランティアが何百人も大挙して、米軍基地の町に集う。この構図は体験したことのないものには少しわかりにくいかもしれないが、そこにキジムナーフェスタの単なるイベント的祝祭ではない、その政治性、メッセージ性があり、演劇の力がたしかに試される場となってきた。

そのようなフェスティバルに、児童青少年演劇の戯曲のリーディングをもってITIが参加するという意味を担当者として何度ともなく考えた。そもそも児童青少年を対象として「リーディング」という特殊な上演形態はそぐわないのではないか（沖縄では大人を対象としたものでもリーディングは行われたことがないらしい）。また、児童青少年演劇に特化した姉妹組織ASSITEJとの「役割分担」がある。一方で、メインストリームを自称する大人を対象とした演劇と、児童青少年演劇とのあいだにある確固とした「壁」が打ち破れるのか…。

考えあぐねるなかで、二つの戯曲に出会った。

ジョン・レタラック作『ハンナとハンナ』（イギリス）、そしてダーリャ・ストッカー作『ナイトブライ

歌舞伎座広告

ンド』（スイス）である。実は、カンパニーの内部でも何度も議論することになったが、これらの戯曲は、その政治性やテーマにおいて、また表現において、日本人感覚では児童青少年演劇の範疇だとは考えにくい作品である。実際に、最後まで児童青少年演劇であるとは認めなかったメンバーもいた。だが、そのような戯曲が、ヨーロッパではティーネージャー対象に書かれ、上演され、受容されているという「事実」を、観客に対して、演劇人たちに対して提示するのはＩＴＩにしかできないのではないかと考えるようになった。芸術性、社会性ともに優れた戯曲そのものに背中を押されて、覚悟を決めた。

『ハンナとハンナ』

『ハンナとハンナ』は、シェークスピア作品の演出で知られ、来日経験もあるベテラン演出家・劇作家ジョン・レタラックがイギリスの青少年たちとのワークショップの成果をまとめる形で書き上げた戯曲である。九〇年代末にイギリスに大量に流れ込んだコソボ避難民の問題を、同じ名前を持つイギリス人とコソボ人の二人の少女の反発と交流を通して描いた作品であり、初演以来、多くの国で上演されてきた。不思議なのだが、去年から、イギリスでこの作品に強い思い入れを持つ何人もの演劇人に出会っている。イギリス演劇のなかでもエポックメイキングな作品だったことが推測される次第である。

『ナイトブラインド』

一方、『ナイトブラインド』は、ボーイフレンドの暴力と依存、壊れていく家族を描いた二〇代の新人劇作家ダーリャ・ストッカーのデビュー作である。デビューのときは十代だったのかもしれない。赤裸々なまでに描かれる青少年の苦悩と、詩的で抽象的な構成が特徴である。視覚に訴えるというよりは、たぶんにラジオドラマ的な要素もあって、リーディングには適している。ドイツ語圏ではかなり上演されているようだ。

財団法人ＪＫＡの多大な支援のもと、キジムナーフェスタ実行委員会との共催で、この少しばかり挑発的なプロジェクトが実施されることになった。次にぶつかったのは、『ハンナとハンナ』を演じられる二人の若く実力があって、しかも歌える女優がいないかもということだ。だが戯曲を読んで、「マナカナ」が手をあげてくれた。また、『ナイトブラインド』にも様々なバックグラウンドを持ったユニークな俳優たちが集まった。キャストもスタッフも誰もが児童青少年演劇は初体験だったが、このチャレンジを楽しんでくれていたことがたのもしく感じられた。キジムナーフェスタ広しといえども、プロによる参加作品で、キジムナーフェスタ開幕以前に初演されていない作品はない。これもまた大きな、そして贅沢なチャレンジになった要素である。

八月六日のリーディング公演初日、大型で強い台風八号の影響で本土からやってくる観客の足が奪われるというアクシデントに見舞われた。しかも台風が運んできたものすごい熱波のために冷房がまったく効かないという事態にも直面した。それにもかかわらず観客の集中が妨げられることがなかったのは、作品、そしてカンパニーの力だと信じるものである。観客の対象年齢を十二歳以上と設定していたが、実際には

もっと幼い観客の姿も多く見られた。マナカナ効果なのだろうが、その幼い観客たちが作品をきちんと受けとめていたように見えたのには少しばかり驚かされた。フェスタ五年目、観客が育ってきているからともいえそうだが、理解されない、児童青少年に不適切とばかりのお叱りをうけるのではないかというのはプロデューサーの杞憂に過ぎなかった。むしろ、このような作品がもっと上演されるべきだ、もっと紹介してほしいという応援の言葉を多く寄せられた。学校巡演する作品としてはなかなか受け入れられることはないかもしれないが、フェスティバルという場を使って、社会性にも富んだ作品がたしかに受容しえるということを示してほしいというものだ。沖縄という場だからできたことなのかもしれないとも思う。だが、たしかに演劇の力に出会ったようにも感じた。このような稀有な機会に携われたことに心から感謝したいと思う。

（会員・プロデューサー）

「感劇・環境」〝演劇〟が喚起する地球環境への感性と国際協力

古川恒一

主催：（社）国際演劇協会
共催：早稲田大学（文化推進部）
協力：早稲田大学国際コミュニケーションセンター（ICC）
助成：（財）地球産業文化研究所

「平成21年度　愛・地球博成果継承発展事業」及び「第12回オール早稲田文化週間」の事業として11月4日（水）、早稲田大学大隈記念講堂大講堂において550人余の観客を動員し実施された。

環境問題を教条的に諭したり、語るのではなく、優れた演劇・リーディングを通して、人々の感性に訴え、想像力を喚起し、肌で環境問題を実感し、しかも国際的な視点から考える、という企画趣旨に沿った3部構成の充実した公演となった。

第1部　学生による朗読劇／リーディング

「水の手紙―群読のために」（日本）

03年「国民文化祭　やまがた・2003」の開会式のために書き下ろされた作品。オーディションで選んだ早大生が群読／リーディングという演劇を実践する中で、井上作品の「水」の問題を通して、世界的・地球的な視野で環境問題を、また演劇が環境問題にどのように貢献できるかを考える。

作：井上ひさし
演出：山下悟
出演：早稲田の学生43名
出演・指導：岩崎正寛、薬丸夏子

第2部　プロの俳優によるドラマ・リーディング

「魚人」（中国）

齢数百年という幻の大魚をめぐり、釣り神と呼ばれる老釣り人と、湖を守る老漁師の宿命的な葛藤を通し、「自然と人間」が寓話的世界の中で浮き彫りになり…。現代中国を代表する劇作家の代表作「閑人三部曲」の一作。

作：過士行　翻訳：菱沼彬晁
演出・上演台本：流山児祥
演出助手：E-RUN
出演：中野誠也、大久保鷹、大内厚雄、阿萬由美、ふじたあさや、犬塚弘、栗原茂、上田和弘、木暮拓矢、武田智弘、山下直哉、流山児祥

「黒い獣　哀しみ」（ドイツ）

1か月以上、雨の降っていない夏の夜の森。赤ん坊を連れた微妙な人間関係男女6人の仲間が酒に酔い、眠りにつくうちに山火事に。死者も出る大惨事。自然の破壊と人間性の崩壊の中で…。

07年ドイツで初演され、翌年ロンドンでも上演された作品。

作：アーニャ・ヒリング
翻訳：萩原ヴァレントヴィッツ健
演出・上演台本：川畑秀樹
出演：熊谷真実、野々村のん、大鷹明良、福本伸一、佐藤銀平、中村彰男

第3部　国際シンポジウム

群読やドラマ・リーディングで紹介した作品を手掛かりに、国際的な

視点から環境問題を、地球環境に対して演劇が持つ役割や効果などを議論する。

パネリスト

胡志毅（浙江大学マスメディア・国際文化学院教授）

池田清彦（早稲田大学国際教養学院教授）

矢野美沙・アンジェリカ・河上隼大（「水の手紙」出演学生）

司会　永井多恵子

第1部の、「…地球が水惑星であることは奇蹟、その水が生命を生み出したのも奇蹟、その水惑星にわたしたちが生きていることも奇蹟、そんな奇蹟的な存在なのだから、わたしたちは生きなければならない、水とともに生きなければならない…」などの作者のテーマ・メッセージを、新鮮かつ真摯な姿勢で、しかも群読という多くの学生が、協力してひとつの作品を作り上げるという教育的効果をも伴った形で訴えた学生参加のリーディング。

第2部の、中国的な味わいの中に、釣りを通して人間と自然の問題が寓話的な世界で展開された「魚人」。如何にもドイツ的な硬質なリーディングの中で、山火事の悲惨さが、自然の破壊と人間性の崩壊に繋がることが明らかになる「黒い獣　哀しみ」。

戯曲の可能性を効果的に作成・表現した上演台本と演出、適材適所のキャスティング、我が国トップクラスのスタッフによる各パートの優れたスタッフィング。「魚人」のドラマティックかつダイナミックなリーディング、「黒い獣　哀しみ」の緻密かつオーソドックスなリーディングという二つ異質なアプローチによる作品は、現在の演劇界で数あるリーディング作品の中でも高く評価される水準の舞台成果となった。

『水の手紙』郡読

第3部の、呉・越や白居易の時代からの美しい自然に囲まれた広州出身の胡志毅教授の、中国での長大な河川での自然破壊の状況等を踏まえ、如何に人と自然とのバランスが大切か、3本のリーディング作品の宗教的・儀式的、人間の営為と哀しみといった優れた演劇的表現が環境問題に訴える可能性についての熱心なお話。池田清彦教授の山火事や人間の死といったものも、実は自然や環境にとって悪いことばかりではないという生物学的視点からの示唆にとんだ指摘や地球的・歴史的視野における米作りが育む自然環境への日本の可能性への言及。井上ひさしの「地球は水の惑星」という作品を読み込み、舞台上で表現することによって、改めて「水」が当たり前のものでなく、実は奇跡のようなものだと実感したなど語った学生の話。残念乍らご母堂の容態悪化のため来日不可能になった過士行氏と急病のため井上ひさし氏がシンポジウムに参加できず、パネリストに当初想

『水の手紙』郡読

『魚人』

定と大幅な変更があったが、演劇的叡智から地球環境の問題を国際的な視点を踏まえ考えるという企画趣旨に沿ったシンポジウムとなった。

地球温暖化防止が世界的な大問題になっている中、時宜にかなう国際演劇協会ならではの事業であり、いみじくも、科学ジャーナリスト・小出五郎氏のプログラム寄稿文「人の力で甦る自然」の最後にある「破壊したのは人だが、再生するのも人である。破壊は絶望をもたらすが、再生には希望がある」を誠実に訴えた事業となった。

観客のアンケートでも「朗読がこんなに立体的に聞けたのは初めてで、お芝居のように観ることが出来ました。想像力をかきたてられて良かったです」「いつも大きな舞台で演じられる劇を観る機会が多いのですが、本日のリーディングはとても新鮮でした。不覚にも“水の手紙”では涙が出そうになり、淡々と切々と読まれる手紙の向こうに、実際に水に苦しみ悩み生きている人々を近くに感じて胸が詰まったような気持ちになりました。「魚人」はまるでお芝居を観ているような錯覚におち、眼前に大きな湖と魚が見えたようでした。アクション・リーディングという印象でした」「ドイツの作品”はステージには椅子と出演者の方しかいないのに、語りだけでそのシーンの風景・温度などが頭に浮かび伝わってきました」

といった好意的・的確な感想が多かった。

（スタッフ）

照明：服部基・阿部康子

奥山愛弓／曽根篤志／松山郁人

音響：渡邉邦男・黒野尚

矢野二郎／堀川悦

美術：池田ともゆき

衣裳：加納豊美

映像：小林倫和

記録：谷古宇正彦

舞台監督：矢野森一　森貴

制作：古川恒一

E-RUN／麻田あおい

日下幸夫／井上裕一／金

栄華（早稲田大学）

企画：永井多恵子

（会員・プロデューサー）

紛争地域から生まれた演劇
―日本・ドナウ交流年に因んで―
■「バルカンの同時代演劇」

奥秋　圭

国際演劇協会日本センターは、これまで隔年で開催してきた「世界の秀作短編研究シリーズ」を継承しつつ発展させ、２００９年11月と12月、日本・ドナウ交流年に因んで、「紛争地域から生まれた演劇」と題して、シンポジウム・レクチャーとドラマ・リーディングを開催した。

レクチャー・シンポジウムでは、旧ユーゴスラビア時代からセルビアに在住する詩人・山崎佳代子氏や、ルーマニアの演劇評論家・劇作家のミハエラ・ミハイロフ氏を招いた。ドラマ・リーディングでは三編の戯曲を紹介。ドナウ文化圏の複雑な歴史的経緯や民族間の問題を総合的に把握し、平和構築のために演劇ができることの可能性を探った。

シンポジウムとレクチャー

シンポジウムとレクチャーは11月20日と23・24日、国際交流基金さくらホールで開催。

20日は「紛争地域の演劇」。前半は山崎佳代子氏による、セルビアの文化状況や最新舞台、また自身の活動についてのレクチャー。内戦前の旧ユーゴスラビアは、ソビエトとは一線を画した立場を保ったため、東西文化の交流地となった。そのため影の部分はありながらも自由な精神が育まれた。その一方で内戦後の94年ころは、画一的な制裁に晒され、文化的な打撃を受けた。これらの体験をふまえ山崎氏は、人間とはそもそも表現をする存在であり、たとえそれが「平和構築」のためであろうと、イデオロギーのために演劇をするのではないと発言。合理性を優先するために表現の自由が奪われてはならないと語った。

次に最近の舞台を紹介。愛憎渦巻く内戦後のボスニアを描いた『チェイフ』に関しては、表現の言葉を選ばざるをえないことや、それぞれの立場によって作品の評価が歪んでし

まうことなどを、自身の体験も交えて語った。

アマチュアの演劇として、自身も参加する「ずどらぼ・だ・すて」の活動を紹介。このグループを組織するヴェスナ氏は、94年より難民センターの子供たちのアイデンティティ保護を目的とした心理ワークショップを開いてきた。現在はさまざまなアーティストが集まり、難民の人々との芸術体験を共有している。ほかにはサラエボの女優、ヤースナ・ディクリッチ氏のアマチュア演劇支援を紹介。これらは両方とも、ベオグラード国際演劇祭（BITEF）で、アマチュアの活動を紹介する部門で上演された。

後半はミハイル・ミハイロフ氏、演劇評論家で東欧演劇通の七字英輔氏、演劇プロデューサーでベオグラード滞在歴もある黒テントの宗重博之氏が加わって、演劇評論家の内野儀氏を司会に討論が行われた。

後半はまず司会の内野氏が、「平和構築」という言葉だけが先行し、そのことによって〈芸術〉であることを担保するのは無意味だと、昨今の現状を批判し、前半の山崎氏の話に応じた。

七字氏は東欧のいくつかの演劇祭について言及したあと、紛争中のサラエボで『ゴドーを待ちながら』を上演した批評家のスーザン・ソンダグの名を挙げ、紛争地域における演劇の力について語った。

宗重氏は、劇団黒テントでのこれまでの経験や、3ヶ月滞在したベオグラードでの経験を通して、演劇の楽しさは人と人とのコミュニケーションであると再認識した、と語った。

左から1人おいてミハイロフ、山崎、宗重、七字、内野の諸氏

ミハエラ・ミハイロフ氏は革命前のルーマニアの演劇状況を、国家による検閲の実態を概説。具体的な検閲例を挙げつつ、検閲逃れのためにメタファーを多用した作品が生み出されたと説明。内野氏はその話を受け、現代社会の相互監視と自己検閲の深化を指摘した。

最後に再度山崎氏が、同じ価値観を持つ者が国境や民族を越えて手を取り合わなければいけないと訴え、この日は終えた。

23日は「平和構築と演劇」と題して、七字英輔氏を司会に、山崎佳代子氏、宗重博之氏、ミハエロフ氏が討論。

山崎氏は、共同体の崩壊によって人間の疎外が見えにくくなっているからこそ、演劇表現の可能性があると述べた。

宗重氏はベオグラードの演劇環境を例に挙げながら、芝居に取り組むための環境づくりの重要性を訴えた。

七字氏はベオグラードの演劇祭BITEFや、ルーマニアのシビウ演劇祭の意義、またEUに加盟したルーマニアの文化状況の変化を述べた。

ミハイロフ氏は、平和構築のためには演劇が根本的な問いかけを常にしていくことが重要だと述べた。

山崎氏は、国家とは自身を守るためのセンサーを持っているとした上で、それに対していかに毅然と対応できるかが大切だと発言。国家やイデオロギーという枠に括られると身体表現はつまらなくなると訴えた。その一方でミハエラ氏は、革命当時のことを描いた演劇作品は、必ずイデオロギー的なものに踏み込まざるをえないとも述べた。いずれも正鵠を射る発言である。

24日は舞台芸術評論家であり、劇作家としても活動しながら、雑誌編集長や、演劇祭の芸術監督などでも活躍しているルーマニアのミハエラ・ミハイロフ氏によるレクチャー。

まず、1930年ごろからのルーマニア演劇を概説。劇場・劇団の国有化に至る流れや、検閲に抗して国外に追放された映画監督ピンティリエ氏のいきさつを話した。革命前の演劇の拠点として、ちいさな町の名を挙げた。都市から離れた場所は、

検閲が緩く、比較的自由な創作活動が可能であったという。現在のルーマニアでも、シビウ演劇祭に代表されるように地方での演劇活動が盛んでありまた、地方での活動を指向するシルヴィウ・プルカレーテのような演出家もいる。

自由な雰囲気に満ちた革命後のルーマニアは、過激な表現を用いた若手らが台頭した。２０００年以降の演出家としては、ラドゥ・アフリム、ラドゥ・スタンカ劇場で活躍するラドゥ・アレクサンドル・ニカ、『ケバブ』のジャニーナ・カルブナリウの名を挙げた。革命前は検閲を逃れるための「メタファー」「シンボル」、革命後はうってかわって「社会」「リアル」がルーマニア演劇のキーワードになっていると語ったのが印象的だった。

『足跡～ TRACKS』

ドラマ・リーディング

もうひとつの企画の軸であるドラマ・リーディングは、12月 16 日～19日、東京・神楽坂のシアター・イワトで行われた。また、18日の公演終了後には演出家たちが集い、『ケバブ』翻訳の市川明氏と、七字英輔氏を司会に交えてのトークが開催された。

『大統領の殺し方』

セルビアのミレナ・マルコヴィッチ作『足跡～ TRACKS』で開幕。翻訳は香西史子、演出は西沢栄治。マルコヴィッチ氏は１９７４年生まれ。ベオグラード演劇大学を卒業し、以降コンスタントに劇作を発表している。『足跡～ TRACKS』は、戦争被災者の少年少女たちが、時代に翻弄され、屈折しながら成長していく姿を描いた作品。

クロアチアのミロ・ギャヴラン作『大統領の殺し方』の翻訳は舟川絢子、演出は野崎美子。1961年生まれのギャヴラン氏は、ザグレブ演劇映画TVアカデミーを卒業後、&TD シアターの座付作家となり、後に芸術監督。自身の名を冠した演劇フェスティバルもある。『大統領の殺し方』は、アメリカ大統領暗殺を目論む弟を廃人にしてしまう精神病院のマネージャーの話で、根深い排他意識を暴いた作品。

『ケバブ』

翌日の17日から開幕となったのが、ルーマニアのジャニーナ・カルブナリウ作『ケバブ』。翻訳は市川明、演出は坂口瑞穂、カルブナリウ氏は１９７７年生まれ。ヨーロッパ各地でワークショップなどを企画、ロンドンのロイヤル・コートでも指導を行っている。シャウビューネでも上演され、好評を博した『ケバブ』は、未来を夢見てダブリンで生活するルーマニアの若者たちが挫折していく姿を描いた作品。

演出家トークでは、担当演出家それぞれの、「公演」とは違うドラマ・リーディング上演のおもしろさやむずかしさ、翻訳上演の問題などが語られた。

（会員）

報告2

インターナショナル ワークショップ vol. 21

《狂言》

下川 理英

国際演劇協会では毎年夏に伝統芸能ワークショップを開催している（文化庁助成）。歌舞伎・能・狂言・日本舞踊と順に行って今年は21年目、5回目の「狂言」である。故内村直也会長がこの催しを始めた当初は、外国人に伝統芸能を通じて日本の文化を紹介しその『理解を深めることを目的としていて、参加者は外国人に限られていたが、1988年の3回目の歌舞伎ワークショップの時に、この手の催しは日本人にこそ必要だという当時の永山武臣会長の意見で国内にも参加を呼びかけて以来、参加者は日本・海外の混成となり、プロの俳優やダンサー、演出家を対象にした特徴ある催しになっている。

さて、すっかり恒例となった感のインターナショナル・ワークショップ。今年は8月10日から19日までの10日間、東中野の梅若能楽学院能楽堂で和泉流野村萬師と九世野村万蔵、野村万禄、小笠原匡、野村扇丞、山下浩一郎、吉住講、高部恭史の萬狂言一門の諸師の指導で朝10時から午後5時半まで講義及び練習が行われた。受講生17名（日本人11人、外国人6人）が本舞台と2階及び3階のシテの間、装束の間、稽古場を使うという恵まれた環境の下で練習に励み、最終日は公開の発表会で締めくくった。

今回は、小舞が「柳の下」と「七つ子」、狂言が「盆山」と「口真似」そして「茸」である。セリフの難しさなどが理由で、小舞は外国人、狂言は日本人に課題として与えられた。

日本人も外国人も自国ではプロの俳優とはいえ、狂言や能独特の立ち方や歩き方、所作、発声法すべてが初めての経験である。慣れない長時間の重心を低くした姿勢や摺り足に受講生たちに辛そうな表情が出る。しかし、それらの姿勢を基礎としてふまえての所作である。先生方は、受講生一人ひとりに丁寧に指導をする。時々、怒号さえ聞こえる。見ている私のほうがひやひやする。しかし、「教えられたことは3回で覚えなさい」と仰っていた先生方は、特別に何度も受講生たちができるようになるまで自らデモンストレーションを繰り返してくださっている。日程の2～3日は基本的所作の習得に当てられた。するとぎこちなかった動きがどっしりとしてスムースなものとなってゆく。受講生たちにほっとしたような表情が浮かぶ。

3日目、基礎ができたところで座学として能舞台の仕組み、狂言の歴史、衣装、面についての講義を受ける。伝統芸能は、背景にある歴史や思想を学んでこそ動きやストーリー、さらに芸能そのものが理解できるようになる。みな熱心にノートに書き込みを行いっていた。また、ここで一人ひとり面をつけて摺り足で歩いてみる経験は貴重なものだったにちがいない。

そして、以降はずっと各演目に分かれての指導である。初めは台詞覚えである。先生が狂言特有の抑揚で読み上げる台詞を受講生たちは耳で覚えてゆく。口語調とはいえ、室町時代の古語である。日本人の受講生でさえ、台詞回しを覚えるのに四苦八苦するのだから、外国人の受講生にとっては、小舞の謡2つを覚える

野村萬先生のお話を聴く

のも対訳のテキストがあるとはいえ並大抵の苦労ではない。先生が一節ずつ日本語の意味を噛み砕いて伝える姿にワークショップならではのきめ細やかな指導が見られた。

さらに、台詞の後は所作の指導である。みな台詞を諳んじることで精一杯で、動きがなかなかついてこない。先生は受講生たちが体得するまで同じ場面を繰り返し指導する。明るく笑顔が絶えない受講生たちに焦燥感が滲んでくる。休み時間も台詞や動きの練習をするようになった。こちらもあと数日後の発表会に間に合うのだろうかと心配になってくる。

面をつけて歩いてみる

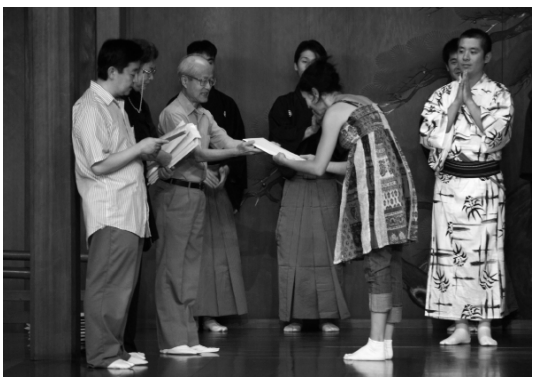
7日目、野村萬先生がご指導に見られた。すべての稽古を和やかにご視察された後、訓示の中で「狂言は台詞よりも動きが大事なのです。皆さんの演技は台詞が先にきていますが、本来ならば台詞よりも動きが先に出てしまうくらいでないと駄目なのですよ」と仰った。確かに私たちは、日常でも言葉よりも行動がつい先に出てしまう時がある。所作が台詞に引っ張られている状況では、まだ自然な演技ではない、という意味である。先生のお言葉に刺激を受けた受講生たちは今までに増して積極的に自習練習を行ったり舞台のVTRを見るようになった。

謡の練習

そして最終日、リハーサルで立ち位置などの最終確認と細かい指導を受けた後、いよいよ先生方に装束を着せてもらい、本番に備える。袴姿にはしゃぐ受講生たちも本番が近づくにつれて硬い表情になってくる。そして、本番。舞台に上がる最初の一歩はどのような気持ちだろうか。心配をよそに発表会は実にのびのびと楽しそうに展開してゆく。終わった後の受講生の清々しい顔には10日間の集大成と成長があった。さらに客席からの割れんばかりの拍手は舞台の完成度の高さを裏付けている。

『茸』

先生方と受講生との真剣な指導、また受講生同士の国籍を超えた交流もまた大きな実りだったといえよう。来年度は「雅楽」だそうである。どんな発展があるか、早くも期待している。


伊藤理事から修了証を受け取る受講生

（法政大学非常勤講師　能楽研究）

（キジムナー、バルカン、ワークショップの項の写真撮影は奥秋圭さん）

ITI 世界大会のゆくえ

どの国際組織でも世界大会というものは定期的に例えば2～3年毎に、世界中の多くの加盟国どうしの情報交流と国際間の相互理解と文化芸術発展のために開催している。創設以来六〇年余の歴史を持つITIも、「憲章」に則って2年に一度世界大会を開催してきているが、開催国は大会最終日に次回の開催希望の候補国を大会全参加国の投票によって決定することになっている。前回のマドリッド大会（08年9月）では次回開催候補国が最終日までわからず（つまり、どこも開催国になりたがらなかった）、最終日に中国が名乗りをあげて、上海でならば上海万博の直後そのインフラを利用出来て好都合だし、アジアで大会を開催することの意義は絶大である云々との大演説の末、理事国入りまでして決まったという経緯がある。ところが、昨年一〇月の理事国会議で、その中国が開催を急遽辞退、2010年9月開催予定が宙に浮いてしまった。（理事国会議には中国代表者は欠席、代理により告げられた。）上海の市長が替わり市の方針が変わったからとの理由であった。

ユネスコが救いの手

世界的不況の折からどの国も世界大会主催国になることを敬遠、とは言ってもITI憲章は守らねばならず、パリの本部は困惑の頂点だったところへ、「世界大会にはユネスコ本部の大会議場を提供する」との申し入れがあったと聞く。これは2月3日に飛び込んできた大ニュースである。ITIはユネスコと公式合意関係を持つNGOでITIの行事のいくつかはユネスコが助成しているという浅からぬ間柄の故の援助であろうかと思われるが、これで本部だけでなく世界中の加盟国のセンターはホッとしたことだろう。

時期は、ワールドシアターデイの直前の4日間、つまり2010年以内の開催からは3ヶ月ずれるが、11年3月23日～26日で、27日のワールドシアターデイのユネスコのセレモニーでしめくくる、という日程である。ただし、ユネスコは組織であって開催国でも主催者でもないから、ワールドシアターデイの式典は主催するが、通常の世界大会で併催される学生演劇祭や大会テーマに沿ったパフォーマンス群を組むことは出来ない。また広報予算や招待予算も無い、従来とは一風かわった大会になりそうである。きたる4月、ダッカ（バングラデシュ）での理事国会議で詳細検討となるだろう。

（国際理事・小田切ようこ）

内村直也賞

2009年度の内村直也賞はまだ決まっていません。選考は4月にダッカで開催予定の理事国会議で行われます。現在までに、日本センターに数件の応募希望が来ています。実際に応募資料としては2カ国からあって、どれも力作です。

東宝広告

■ 2010 年ヨーロッパの新しい演劇

6 月 17 ～ 27 日

ドイツ、ヴィスバーデンで 2 年毎の開催されている国際演劇祭である。前身は有名なボン・ビエンナーレ（初回は 1992 年）。当初はヨーロッパ各地域からの優れた作品を招聘上演したことにより、期間中の観劇でヨーロッパの舞台芸術の新傾向を知ることができた。ボンからヴィスバーデンに移ってからは EU の新たなメンバー国が次々に加わり、ユニファイされたヨーロッパのパースペクティブを呈するようになり催しは注目を集める。www.newplays.de, biennale@staatstheater-wiesbaden.de

■ 第 14 回国際古代ギリシャドラマフェスティバル

パフォス、リマソル、ニコシア（シチリア）

7 月 1 ～ 31 日

キプロス教育文化省、ITI キプロスセンター主催

参加応募は昨年 12 月末までに上演された古代ギリシャ劇（悲劇、喜劇）で翻案は認めず、上演言語は自国語で。www.cyprus-theatre-iti.org

■ 第 1 回ラテンアメリカ演劇学校演劇アカデミーのためセミナー

7 月 14 ～ 24 日　サンタマルタ（コロンビア）

学生および演劇教育者のトレーニングセミナー。

■ 第 21 回カリブ海沿岸地域演劇祭

9 月 6 ～ 11 日

ラテンアメリカ諸国およびコロンビアの芸術振興と情報交流が目的の演劇祭　コロンビアセンター主催

■ 第 13 回欧州児童演劇の出会い

7 月 1 ～ 14 日　ズヴェニゴロド（モスクワ近郊）

国際アマチュア演劇連盟ロシアセンターおよびロシア演劇ユニオン主催

西欧、東欧から 15 カ国のエントリー決定、12 ～ 14 才の児童のグループ 8 組、成人グループ 2 組が参加する。午前午後とも演劇スキル訓練、マスタークラスあり。

■ 国際大学演劇協会ワールドコングレス

6 月 28 日～ 7 月 2 日　レスター（UK）

会場はレスターのド・モンフォート大学。2010 年のテーマは [演劇と教育（Theatre and Pedagogy)]

詳　細：www.dmu.ac.uk/faculties/humanities/cepa/international-university-theatre-association/index.jsp　又は www.aitu-iuta.org

■ 国際児童演劇フェスティバル「君の夢の実現を！」

6 月 18 ～ 25 日　リンゲン（ドイツ）

今回のモットー「君の夢の実現を！」は児童へのアピールであると同時に大人たちに向けたアピールでもある。児童を、人々を、勇気づけることにより社会教育的、社会文化的、芸術的な想像と芸術の社会化へと発展する、といった理想が先行しているが、それを現実化可能に近づけることがこのフェスティバルなゴールである。

■ 第 80 回イラスクフ・フロノフ

7 月 30 日～ 8 月 7 日　フロノフ（チェコ）

質の高いチェコのアマチュア演劇を世界各国からの参加グループとともに 80 年もの間 1 度の中断もなく紹介し続けているヨーロッパで最も古い歴史を持つフェスティバルである。2010 年はその 80 周年を祝って、CEC（国際アマチュア演劇連盟中央ヨーロッパ・コミティー）を招聘し、中央ヨーロッパ地域の優秀なアマチュア劇団の参加を計画している。パフォーマンス作品の主体はチェコと中欧だが観客はいずれからも歓迎する。素晴らしいアマチュア演劇のバリエーションを堪能して下さい。台詞劇、無言劇、パントマイム、ダンス、音楽、実験的なもの、詩作、人形劇 etc. 自由な演劇をどうぞ。

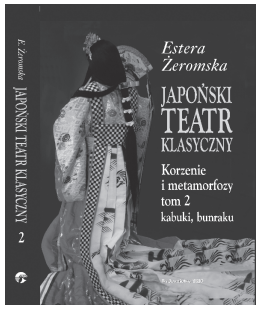
www.aitaiata.org

■ 2011 年の出会いを求めて

2010 年、日程未定　ITI スイスセンター

演劇文化を担うスイスの団体／プロ・ヘルベティア、スイス作家協会、仏語圏劇作家協会 etc. 独英仏の言語の問題と創造性を検証する。

■ 日本の伝統芸能の書籍が出版されました
ポーランド／エステラ・ゼロムスカ著　全２巻



第１巻は能・狂言、第２巻は歌舞伎・文楽について。各巻 500 ページ以上、A ５版フルカラーの豪華本、力作です。ゼロムスカさんは ITI ポーランドセンターの紹介で来日、著書刊行までに５年費やされました。この間日本センターは故永山会長のご協力もあって随分お手伝いをしましたが、１月末にポーランドの切手をふんだんに貼って郵送されてきた時は携わった事務局に爽やかな感動の瞬間がありました。ポーランドで初めての日本演劇の書籍。定価は日本円にして各巻２万５千円程だそうです。

■ 第１回ギリシャ・アテネ国際ストリート・シアター・フェスティバルの報告

前号でお知らせしたフェスティバルの報告です。ITI ギリシャセンター主催、ギリシャ文化省・国立演劇ダンスセンター共催で、およそ 60 グループ、内外 400 人のアーティストの参加があり、アテネ中央の歴史地区で５日間にわたり繰り広げられた。オープン・ファスティバル部門参加グループは投票で本公演のチャンスあり。

■ ITI ギリシャセンターからのお知らせ

「劇作ワークショップ／ドラマ執筆のためのワークショップ」を毎年開催。劇作家志望者をサポートすることが目的とするラボ形式の講座で今回は昨年 12 月から本年６月まで。

■ 中国におけるオランダ芸術

ITI オランダセンターは上海万博の期間中、上海オランダ文化センターで現代オランダ芸術を展示する。

■ イベロ・アメリカン独立 200 周年記念イベント

2010/5 月～７月、ITI コロンビアセンター主催、ヒスパニック劇場を特集する。

■ ダイアローグの芸術

知的演劇リサーチ・プロジェクトとして２年間の長期にわたって調査を援助する。ベルリン、AKT-ZENT 国際演劇センター。ヨーロッパ・コミッションのサポートで現在 17 の芸術団体、11 カ国が参加しており、好評である。

■ リュブリアナ・ショーケース

６月／ITI スロヴェニアセンターはリュブリアナフェスティバルの期間中スロヴェニアの舞台芸術のエキジビションを試み、主にオープンエアーのパフォーマンスを紹介する。

■ ニュー・ドラマ・フェスティバル

５月 10 ～ 15 日　ブラティスラバ（スロバキア）
スロバキア演劇研究所とアレーナ劇場が 2005 年以来続けているフェスティバル。毎年、前年の最優秀現代スロバキア作品と世界の秀作を紹介している。発端は演劇現場の労働者や職人の要望から始まったフェスティバル。現代スロバキアの演劇の傾向を知るには最適。

■ 第 40 回スロヴェニア・ドラマフェスティバル

フェスティバル期間中に、ITI プレイライト・フォーラムのコミティー・ミーティングが開かれる。ITI プレイライト・フォーラムは**新人戯曲賞のコンペティション**を行っている。次回作品のテーマは「難民／亡命者／アイデンティティー／移住者」で、現代が抱えている世界的な問題を創作のベースにした作品を募集する。締切６月 30 日。１人芝居は避けること。英語フランス語アラビア語の何れかで 100 ページ以上の作品。賞金あり（１等３千＄、２等２千＄、３等千＄。www.playwrightsforum.com

事務局より

会員の消息
（敬称略）

会員の受賞

文化勲章　坂田藤十郎

文化功労章　片山九郎右衛門

日本芸術院会員　井上ひさし

市川幸四郎

紀伊國屋演劇賞

流山児★事務所

国民栄誉賞・従三位　森繁久彌

第五十七回菊池寛賞

坂東玉三郎

誠におめでとうございます。

ご逝去

南田洋子（10月25日）

森繁久彌（11月10日）

金子和一郎（11月13日）

東恵美子（1月8日）

土方与平（1月22日）

謹んでご哀悼の意を表します。

夏の伝統芸能ワークショップ

平成二十二年度の伝統芸能ワークショップは、通常の順番ですと「日本舞踊」ですが、海外からの要望もあり、事業委員会（委員長／流山児理事）で検討の結果、8年前に初めて実施した《**雅楽**》に再度トライすることになりました。「文化庁への申請が採択されれば、」という条件付きではありますが、準備は進めています。わが国の最も古い〝総合芸術〟へのとりくみに期待が広がります。ワークショップも二十二年目、芸能のルーツと演劇の探求には終りがありません。

会員の皆様へ
会費の納入及び新規会員ご勧誘のお願い

皆様ご存じのように、ITIは、UNESCOに加盟するNGO（非政府組織）です。UNESCO傘下の２００ほどもある各種機関のうちでも、ITIは最も活動が活発で、演劇に関する国際的な情報交流、人物交流、国際ネットワークを活かした各種プロジェクトが進行しています。各国センターの運営は、それぞれの国の事情があり、政府から手厚い補助を受けているセンターと、主として民間の自助努力で奮闘しているセンターとでは、おのずから運営の安定度が違っています。

日本センターは、民間団体（社団法人）として、ある程度自立的な運営を要請されており、会員の皆様の会費は、ITI日本センターの活動費に充てられるだけでなく、ITI本部への納付金にも充てられております。

日本センターがITIの国際的なネットワークの一員として活動できるのは、会員の皆様の支えがあってのことです。ITIの活動をより充実させるために、ぜひとも本会に皆様のお知り合いをご勧誘ください。よろしくお願い申し上げます。